

タイ語資料の宝の山っ!!

国際コミュニケーション学部助教授 加納 寛



私は「タイ語の先生」です。赴任当初は、よく「体育の先生」や「太鼓の先生」に間違えられました。最近、こうした間違いがなくなったのは嬉しいかぎりです。

なぜなら、愛知大学におけるタイ語教育が認知されてきた結果だと思えるからです。

実は!! (ここにビックリ・マークを使うこと自体、前の段落を否定するようなものだけ)、愛知大学は、タイ語を第2外国語として教えている、中部地方においてはきわめて珍しい大学なのです!! (力説っ!!)

ということで、愛知大学にはタイ語関係の書籍や資料が、日本でも有数の規模で収められているのでした(そもそもタイ語資料を恒常的に購入している日本の図書館は数少ない)。今日は、それらの宝物♥のうち、図書館に収められているものを紹介します(ほかに、LL自習室にも、書籍やビデオ・テープをはじめ、多くの資料があります。こちらについてはLLニュースを見てくださいネ)。

なんといっても愛知大学の図書館の嬉しいのは、タイの日刊紙が入っていることです。ほんの数日の遅れで、政治から猟奇事件(なぜかタイの新聞は、猟奇事件関係にやけに熱心です)にいたるまで、タイの毎日の動きがわかるのは、タイを研究・学習する者やタイ語を学ぶものにとってありがたいことです。確かにインターネットでも事の概略は追えるのですが、紙面で詳細に事件を見ていくのとは深みがちがいます(私は旧人類?)。タイの日刊紙「タイラット (Thai Rat: ไทยรัฐ)」は、最新のものを1階の新聞架で、同じ月のもを1階奥の新聞棚で、古いものを第2書庫で、それぞれ見ることができます。イン

クの香りをかぎながら(タイの新聞は、なぜか濃厚なインクの香りがするので、意識しなくても匂いをかいでしまう)タイの新聞を広げる… そこに広がるプチ・タイの世界… すばらしい一瞬です。

しかーし!! そうした甘い一瞬を打ち破る危険が、タイの新聞には満ちているのでした。本学が購読する「タイラット」は、タイで最高の発行部数を誇る新聞です。ということは、タイの「大衆紙」です。ということは、記事のノリがスポーツ新聞的になっているのです。ということは、なぜか第1面に、身体表面の被覆率がきわめて低い人物の「あられもない」カラー写真が、でかでかに掲載されてしまっていたりするのでした。そしてまた、前に書いたように猟奇事件関係にやけに熱心なため、飛び降り自殺した人の生前の姿と飛び降り後の姿が、美容広告の使用前・使用後の感覚で並べられていたり、焼死体



までがカラーで第1面に載っていたりしてしまっているのです。甘い一瞬は見事に打ち砕かれ、こうした写真がまわりの人々に気づかれていないのを横目でチラチラ・ヒソヒソと確認しながら、第1面を隠して第2面から読んでみたりするのです。時として、前の座席で勉強していた人が、憐れむかのような目で、そして危険なものでも見るような目で私を見ると、タイの新聞に宿るこの危険性に身震いしてしまうのです(ちなみに当然のことながら、「高級紙」や「ビジネス紙」では、こうした危険はありません)。

また、こうした新聞が蓄積されていくのも愛知大学にとって貴重な財産となっています。ちょっと昔の事件について調べたい時に、この蓄積はきわめて有効です。書庫で、ある事件を報じる記事を2週間分まとめて読んでいくとき、愛知大学に在ることの幸せを感じるのです。新聞の蓄積性も、インターネットでは入手できない情報となっています。愛知大学にタイ語教員が配置されるより以前の(すなわち「タイラット」が購入されるより以前の)新聞については、マイクロ・フィルムの日刊紙「マティジョン(Matichon: มติชน)」が入っています(本当は「タイラット」を購入すべきですが、「タイラット」はマイクロ・フィルム化されていません)。これにより、1970年代から現在にいたるまでの範囲であれば、日刊紙レベルで新聞記事を追うことが可能になっています。

マイクロ・フィルムとしては、今後、タイ政府の官報(Ratchakitchanubeksa: ราชกิจจานุเบกษา)を揃えていく予定です。官報には、当然タイ国の法令をはじめ貴重な情報が記載されるので、タイ研究について貴重な情報をもたらしてくれるものと期待しています(タイの国立図書館では、司書さんに申し出ると、古い官報を見ることができます。でも、見てるうちに紙が崩れてきます(わかります?)。コピーでもとろうものなら、コピー機の周りにさつきまで官報だったものの破片が飛び散りま

す。私の予想では、そのうち古い官報のコピーは禁止されるでしょう。タイの大学図書館の中には、官報のマイクロを取めている図書館もありますが、コピーをとるのは結構面倒で時間がかかるうえ、コピー経費もガッポリとられます)。

このほか、タイの雑誌も、続々と(雑誌なので「続々と」入るのは当たり前ですが)愛知大学図書館の蔵書に加わっています。こちらはどちらかといえば「高級感」ただよう雑誌が中心なので、日刊紙タイラットに潜んでいるような危険性は孕んでおらず、安心して広げることができます。たとえば、「シンラパ・ワッタナタム(Sinlapawatthanatham: ศิลปวัฒนธรรม)」は、タイの芸術・文化愛好家たちの雑誌です。「ムアン・ボーラーン(Muang Boran: เมืองโบราณ)」も同じですが、より考古学色が強いものです。「オー・ソー・トー(O.S.T.: อ.ส.ท.)」は観光雑誌です。タイを旅する気分になりたいとき、開いてみるととても幸せです。この雑誌には付録の観光ガイド小冊子がついています。コピーして旅行に持っていくと便利です。ね。「マティジョン・スット・サップダー(Matichon SutSapda: มติชนสุดสัปดาห์)」は、いわゆる高級日刊紙「マティジョン」の週刊版です。政治の動きなど、日刊紙より深く分析されているので、目を通しておくとよいでしょうね。

このように、愛知大学図書館は、日本における数少ないタイ語資料の宝の山(の一つ)です。ぜひ皆様にも、タイ語を学んでいただいて(巷で思われているほど難しい言葉ではありません!!)、これらの資料を活用していただきたいものです。愛知大学の得意とするアジア研究の一環として、本学がタイ研究の全国的な拠点となるようにタイ語資料を揃えていただければ、愛知大学に在籍するタイ研究者としてこれにまさる喜びはありません!!(キッパリ) 今後とも皆様のご理解とご助力を願う次第であります。(ペコリ)